

祝宮静の豆州内浦漁民史料調査にみる水産史研究の展開

Miyashizu Houru, his Contribution Toward Zushu-Uchiura Gyomin Siryo
(Historical Materials Relating to the Fishing Population of Uchiura in Izu)
Compilation Project and Historical Study of Fisheries in Japan

葉山 茂

HAYAMA Shigeru

要 旨

本稿は、戦前の渋沢水産史研究室において祝宮静が研究所の活動で果たした役割を、祝の生い立ち、学問的背景などに注目して検討することを目的としたものである。

祝宮静は神社経済史を専攻する研究者であり、渋沢敬三との出会いにより豆州内浦漁民史料の刊行に携わり、戦後は民俗資料の専門家として活躍した人物である。祝の研究分野のうち、神社経済史と豆州内浦漁民史料に関わる研究で、祝は労働問題と身分制度を研究上の問題関心としてきた。

祝の労働問題と身分制度に対する関心は、中学生時代に父親から勧められて読んだ『古事記神話の新研究』の作者であり、社会運動家の石川三四郎との出会いにより拓かれた。祝はその関心を、大学時代を通じて労働問題と身分制度という視点に昇華し、研究に反映した。

こうした状況のなかで出会ったのが渋沢敬三であり、豆州内浦漁民史料である。豆州内浦漁民史料は、渋沢が沼津市内浦地区で出会い、寄贈を受けて所有者に資料集の刊行を約束した古文書群である。渋沢は社会経済史の視点をもつことで、古文書群を網羅的に集めた。渋沢の視点は、当時の古文書研究に対するアンチテーゼであった。

史料の刊行に携わった祝宮静は、渋沢の「論文を書くのではない、資料を學界に提供する」という方針の下、欠字の補完や注釈の付与する仕事をした。史料は1940年に『豆州内浦漁民史料』全4巻として刊行された。刊行後、祝が豆州内浦漁民史料を用いて始めた研究は、身分制度に着目したものであり、成果は戦後、博士論文として結実した。本稿ではこうした経緯を踏まえ、祝が渋沢の方針の実直な具現者であったことを指摘した。

【キーワード】 労働問題、奴隷制、社会経済史、渋沢敬三、祭魚洞文庫

1. はじめに

祝宮静は、戦前期に渋沢水産史研究室が成立する直前に渋沢敬三と出会い、渋沢が集めた静岡県伊豆半島の内浦地区の文書群である、豆州内浦漁民史料を整理した人物である。祝宮静が関わった豆州内浦漁民史料の整理は、のちに戦前期における渋沢水産史研究室の所員たちの研究の方向性に一定の影響を与えた。

豆州内浦漁民史料の整理が戦前期における渋沢水産史研究室の研究を方向づけたことは、さらに踏み込んで言えば、戦後の水産関連の研究において歴史学や地理学、人類学、民俗学などの人文学的な研究方法を方向づけるものでもあった。

上記のように豆州内浦漁民史料を意味付けると、渋沢水産史研究室において、祝が果たした役割は大きい。祝といえ、民俗文化財制度の制定に尽力した人物として有名であり、とくに民具研究の功績が大きい。

一方で、一見すれば祝が水産業・漁業の研究において華々しい活躍をしたようには見えない。しかし祝と豆州内浦漁民史料との関わりを追うと、祝が渋沢敬三の意図した水産史研究の方針を堅持し、戦後の長い期間をかけて研究成果を積み上げていった姿がみえてくる。

渋沢水産史研究室は、桜田勝徳や竹内利美、羽原又吉らのように、のちに水産史・漁業研究の大家に育っていく人びとを輩出した。また宮本常一も瀬戸内を中心とする漁業を含む生業の展開に関心をもって研究活動をしていた。

こうした人びとと比べると、祝の足跡は水産史・漁業研究という意味では地味であった。しかし渋沢敬三の示した研究の方向性に関していえば、祝は忠実な具現者であったと評価することができそうである。

そこで本稿は、戦前の渋沢水産史研究室において祝宮静が研究所の活動で果たした役割を、祝の生い立ち、学問的背景などに注目して検討することを目的とする。

2. 祝宮静の生い立ちと学問的関心の醸成

はじめに述べたように、祝宮静は戦前期に渋沢敬三との出会いによって豆州内浦漁民史料の整理に携わり、戦後は文化庁の文化財調査官として民俗文化財、とりわけ民具資料の文化財指定において多大な役割を果たした。

その祝は、本来、神社経済史を専門とした研究者であった。祝は神社史研究、水産史研究、民俗文化財研究の三つの顔を持った研究者であった。こうした祝の研究の関心は、生い立ちと出会いによって形づくられてきた。以下では、とくに渋沢敬三と出会うまでの祝の足跡を追い、祝がどのようにして渋沢敬三と出会うに至ったのかをおもに祝の古希記念著作集『神道・神社・生活の歴史』[祝 1976] に依拠してみよう。

祝は 1905 (明治 38) 年に京都で、子爵園池家の養子であった父と大分県臼杵の宮司の娘であった母との間に生まれた。祝が生まれた当時、父は京都市の加茂御祖神社の宮司をし、京都市近郊の下鴨村に居を構えていた。祝はこの京都市近郊の下鴨村で幼少期を過ごした。

1908 (明治 41) 年に母の希望で、京都市内の幼稚園に通うことになった。祝はこの幼稚園でのちの京都大学名誉教授・愛媛大学長となる植物生理学者の芦田譲治と出会った。祝によれば、芦田を頼って幼稚園に通ったのだという [祝 1976, p. 3]。

その後、祝は京都府師範学校付属小学校を経て、京都一中に入学する。中学校5年生のとき、同級にノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎や農学者でのちの京都大学総長となる奥田東などがいた。祝が青年期を過した環境には、こうした多様な専門分野を極めていく人物たちが集まっていた。

中学5年生のとき、祝は父の勧めで石川三四郎の『古事記神話の新研究』と出会った。石川三四郎は、明治後半から昭和にかけて活躍した日本の社会運動家であり、アナキズムの中心を担った人物である。

祝の父はこうしたアナキズムとは一線を画し、祝が大学に進学する際も「国学院以外は行かない」[祝 1976、p. 8] とし、その理由を「ほかの大学に行くと生意気になるから」[祝 1976、p. 8] と説明する人物であった。祝は「なぜ父が『古事記神話の新研究』を貸してくれたのか、その意味は今でもわからないのである。石川先生が永くフランスに在住していた社会主義者だということは、父も知らなかったとおもう」[祝 1976、p. 8] と述懐している。

父から石川三四郎の著作を紹介された祝は、本を読んで石川に連絡をとり、複数回、会いに行ったのだという。そこで祝は石川の話聞き、西洋史に興味をもつようになり、なかでもギリシアやローマの奴隷制に注目するようになった。この関心は、大学進学時に起きた社会的な事件との関わりの中で、祝の研究上の興味関心へと成長していった。

祝は父の意向により、國學院大学に進学する。進学した年は父が死去し、自分自身も病気で休学を余儀なくされた。この時期に関東大地震が起き、災害後に社会主義思想家の大杉栄が憲兵に殺害される、いわゆる甘粕事件が起きた。祝はこの事件にショックを受け、事件をきっかけとして、経済学者で東京帝国大学助教授の森戸辰男が同大学経済学部機関誌『経済学研究』に著した「クロポトキンの社会思想の研究」めぐって大学を追われた、1919（大正8）年のいわゆる森戸事件[東京大学百年史編集委員会 1985、pp. 309-314]を知るようになった。

森戸事件を知った祝は、祝は弁証法的唯物論や共産党宣言、社会主義の歴史、唯物史観、労働運動に関心をもつようになり、社会主義運動に注目するようになった。結果的に祝は石川との出会いによって拓かれた西洋史や奴隷制への興味関心を深め、労働・奴隷制を研究の視点としてもつようになっていった。

祝が進学した当時の國學院大学には、人類学、民俗学などの著名な研究者が集まっていた。祝はそれらの研究者から研究の視点を学んだ。祝は坪井九馬三から人類学を、折口信夫から民俗学を学んだ。また島地大等・花山勝信から仏教概論を学び、中学時代に興味をもった西洋史はとくに力を入れて学んだ。祝は哲学では、アルトゥール・ショーペンハウアーを好み、ベネディクト・クロウチェに傾倒した。

こうした足跡をみると、祝が大学時代に幅広い分野に興味をもち、知識を身につけていたことがわかる。一方で、中学時代に出会った西洋史や奴隷制への関心は、大学時代には労働問題・奴隷制の問題として洗練されていった。先に述べたように、祝はのちに神社経済史を専門とする研究者になるが、祝が神社経済史の対象として取り上げた課題のなかでも、労働問題や奴隷制は中心的なテーマだった。

大学を卒業した祝は、同大学の講師として教鞭をとる。そして『國學院雑誌』に「大化以前の労働制度に関する考察」[祝 1929a] や「律令による雑戸陵戸の比較」[祝 1929d]、「原始労働の類別（バクストン）」[祝 1932]、『史苑』に「律令時代の賤民制度概説」[祝 1929e] や「我が国奴隷経済時代に於ける奴隷と其の使役者との交渉」[祝 1929f] などの論考を次々に発表していった。これらの論考の中心となったのも労働問題や奴隷制であった。

こうした論考を重ねるなかで、祝は1933（昭和8）年に大学の恩師である植木直一郎の紹介で、

渋沢敬三と敬三が集めた豆州内浦漁民史料と出会った。以下では豆州内浦漁民史料の概要を整理し、渋沢敬三が豆州内浦漁民史料と出会い、祝宮静が豆州内浦漁民史料を整理することになるまでの経緯をみていこう。

3. 豆州内浦漁民史料と渋沢敬三

豆州内浦漁民史料は、静岡県沼津市内浦湾地区の民家が所蔵していた資料の総称である。内浦長浜地区の大川四郎左衛門が所蔵していた大川家文書が、資料群の中心を成している。この資料群は、よく知られているように、渋沢敬三が病氣療養のため訪れた内浦で偶然に出会い、早川孝太郎や渋沢の病氣療養の主治医であった柴豪雄らとともに一部を筆写したのち、大川四郎左衛門ら地域の所蔵者から寄贈されたものである。以下ではまず、豆州内浦漁民史料の由来をみていこう。

1) 豆州内浦漁民史料の由来

豆州内浦漁民史料は、静岡県沼津市内浦長浜地区の大川四郎左衛門が所蔵していた古文書群を中心とする資料群である(写真1)。以下、大川家に所蔵されていた文書は大川家文書と呼ぶことにする。大川家文書を中心とする豆州内浦漁民史料は、鎌倉時代から明治時代初頭にかけてのおよそ400年間の長浜の生活の有り様を示す地域歴史資料としての性格がある。

渋沢敬三はこれらの文書群に「常民の間に取り替された文書であること、地域的に集中していること、年代的に継続していること」という性格を見出し、常民古文書⁽¹⁾と呼んだ[渋沢 1972a、p. 1]。この文書類の内容は、地域の漁業慣行や家の継続に関わるもの、江戸との交渉や交流などを含んでおり、学問領域でいえば、国史・漁業史・経済史・法制史・税制史・行政史などさまざまな分野に跨り、文書同士が関連し合うものであった。

渋沢は大川家文書が豆州内浦漁民史料の中心をなすことになった経緯について、「徳川時代から明治へかけて津元の總元締としてあらゆる訴訟に又歎願に際してその資料として、證據として用ひたため、當家に集つたので翁の所になるものは全部が一家のもの、みでなく、他家の史料も已に蒐集包含されてゐたためである」[渋沢 1972、p. 15]と説明している。

渋沢は古文書が読めなかったものの、「容易ならぬ史料であると云ふことには氣が付いた」[渋沢 1972、p. 15]として、内浦六ヶ村の津元の家をまわって史料を集めている。しかし上記の理由により、内浦六ヶ村の文書が大川家に集まっていたことから、大川家文書が豆州内浦漁民史料の中心を成すことになった。

この地域では「静岡県史料」の編纂事業にともない、1926年から1928年にかけて調査対象となっていたものの、当時、のちに詳しく述べるが、大川四郎左衛門がよそに出て不在であったため、偶然にも調査を免れることになった。その結果、大川家文書は調査員にとって重要と考えられる文書が行政機関に所収されることなく、ほぼ資料群全体が現地に現存することになったのである。

祝はこの件について、豆州内浦漁民文書の解説のなかで、「静岡県史料」の収集が行われていたころ、(昭和一年～三年)大川翁は長浜に居なかったので、その収集から外されたのであって、この



写真1 長浜の大川家長屋門

とき収集されていたら『豆州内浦漁民史料』のうち、いわゆる古文書学的な意味で価値が高いものは残されていなかったかも知れない。そうすると古文書学的な意味で価値の低いものは、反故あつかいされて散失してしまったかも知れない」[祝 1973、p. 1161]と述べている。

渋沢や祝がこうした史料の価値付けと選別を問題にするのは、当時の学术界において文書集収が、調査者の恣意的な価値付けによって選別してしまい、政治的な意味での歴史以外の、いわゆる一般の人びとの暮らしに関わる記録を無視していたことによる。この点については、4で社会経済史の視点に関連して改めて論じる。以下ではまず、豆州内浦漁民文書の中心を成した大川家文書の所蔵者である大川家と大川四郎左衛門について概観しよう。

2) 大川家と大川四郎左衛門

大川家は鎌倉時代に兎玉氏として鎌倉時代に内浦の長浜に居を構えた家の子孫である。1430年に降に大川氏を名乗り分家し、以降、長浜で津元、村君、網元、あるいは親方と呼ばれ、網漁を経営してきた。大川家の当主は、代々、大川四郎左衛門の名を継承してきた。

明治維新と前後して、大川家が漁場を占有する形態は崩れることになった。渋沢による大川四郎左衛門への聞き取りによれば、明治維新前後から次第に網子が津元の話が聞かなくなっていたところに、1896(明治9)年の地先海面公有化の施策が実施されることになった。地先海面公有化は、実際には実施されなかったが広い海面を自分の海と考えていた大川家にとっては驚きであったという。結局、十年間の海面借用という形式で漁場の占有は許可されることになったが、その頃から津元の力は弱っていったという。

大川家は新たな漁業制度のもとでの網子以外の人びとを集めて6人組で網漁への参入を企て、海での経済的な回復を試みた。しかし網子との漁獲競争に負け、網漁の事業に失敗したことから、漁業から撤退した。

大川四郎左衛門は、江戸から明治への転換期にカトリックの洗礼を受けてキリスト教を信仰するようになった(写真2)。しかし津元が網子のように漁ができないことから来る嘲笑などに堪え兼ねて、網漁を廃業したのちに、東京に移り住んだ。

大川四郎左衛門は東京でニコライ教会に出入りしながら、油屋を営んだ。その後、伊豆大島に移り住むも、1930年前後に縁あって地元に戻ってきた。渋沢敬三が大川四郎左衛門と大川家文書に出会ったのは、大川四郎左衛門が帰郷してすぐのことだったのである[渋沢 1972a]。



写真2 大川四郎左衛門が残したアイコン

3) 渋沢敬三と豆州内浦漁民史料との出会い

渋沢敬三は、1932(昭和7)年、祖父である渋沢栄一の死去後、看病の疲れなどから急性糖尿病を患った。その治療のため静養が必要との医師の見立てによって、医師の柴豪雄を伴ってかねて幼少期から穂積陳重一家ともに訪れたことのある沼津市静浦に近い三津に逗留した。その逗留中に、地元の漁師から紹介されたのが大川四郎左衛門である。

渋沢は三津に逗留中、地元の漁師である傳治郎に地域の漁業について再三に尋ねたことから、傳治郎は最近地元に戻ってきた地元の漁業の歴史に詳しい人物として大川四郎左衛門を紹介した。そ

の大川四郎左衛門は、渋沢の宿を訪ねるとき 1573（天正 18）年の秀吉の朱印状を持参した。

この秀吉の朱印状と大川四郎左衛門の話に興味をもった渋沢は、「村の古さ、家の継続、地割制度にも似た海上慣行、また翁の話には餘り出なかったが、この村が天領であった関係上、幕府の特殊財源になってゐたこと、また魚の豊富なことは現在のカムチャツカの様であったこと、従つて意外に江戸日本橋との関係が深かったこと」〔渋沢 1972a, p. 14〕などから、大川四郎左衛門が所蔵する古文書群をみたいと考え、後日、大川邸を訪ねた。そして文書の量と年代の古さに驚き、一部分ずつ借り受けて筆写を始めた。

大川四郎左衛門は「自分の家にとって恥になる様な事も書いてあるものも有るかも知れぬが、それだけは氣をつけて欲しい。併し後はどう寫されても構はぬから御覽なさいと極めて寛容な態度で自分を信頼してくれた」〔渋沢 1972a, p. 16〕といい、分量の多さからその後、早川孝太郎を三津に呼び寄せ、渋沢の療養に同行した医師の柴豪雄とともに、ときには見舞いの客も巻き込んで 2 ヶ月ほど筆写を続けた。

当初、渋沢らの行動に不思議な顔をしていた大川四郎左衛門も、やがて渋沢たちが文書から得た知識に基づく質問をするようになって感激した。大川家の文書を一通り閲覧したのち、ほかの津元が所蔵する文書も筆写した。その後、渋沢が帰郷する直前になって大川四郎左衛門が宿を訪ねてきて、大川家文書の寄贈を申し出たのである。

そこで渋沢は、大川家文書が散逸せずにまとまっている点に価値があるとして、村の 400 年間の記録の集大成として出版をしたのちに、しかるべき機関に寄贈を受けることを提案した。その結果、出版されたのがアチックミュージアム彙報の第 20、24、33、42 の各巻〔第上巻、中巻之壺、中巻之式、下巻〕の 4 巻本の『豆州内浦漁民史料』である⁽²⁾。この資料整理の際、渋沢は藤木喜久麿を呼び寄せて整理を依頼している。渋沢はこの一連の出来事を「魚を釣るつもりでかえって古文書を釣り上げてしまった」〔渋沢 1972a, p. 25〕と言い表している。

4) 資料としての文書の筆写という手法の系譜

前述のように渋沢敬三は、大川家文書と出会い、東京にいた早川孝太郎を呼び寄せたり、同行した医師の協力を得たりして、文書の筆写を試みている。この筆写という手法は、どのようにして導入されたのだろうか。疑問は、大川家文書との出会いによって初めて筆写という手法を用いるようになったのか、あるいは大川家文書以前から筆写の手法は用いられていたのかということである。

そこで渋沢敬三が大川家文書に出会う 1932 年以前に、アチックミュージアムの記録として筆写が記述されているかを探してみると一点のみが見つかる。それは『渋沢敬三著作集 第一巻—祭魚洞雑録 祭魚洞襍考』の「アチックの成長」〔渋沢 1992, p. 13〕に記述されている藤木喜久麿の活動である。

藤木は初期のアチックミュージアムで、管理者の役割を担った人物である。渋沢の回想によれば、藤木はアチックミュージアムに集まった玩具資料の整理・研究に携わる一方で、柳田国男の委嘱により東京府庁が収蔵していた近藤富蔵の『八丈島実記』の謄写を手掛けたという。渋沢はこの写本を藤木に 4 部つくらせ、そのうちの 2 部を柳田国男と折口信夫に寄贈している。また藤木は台湾・琉球調査のときに首里市の市長であった仲吉朝助氏が所蔵していた『琉球産業資料』の複写も手掛けている。こちらはのちに柳田と農業経済学者であった小野武夫に贈っている。小野武夫はこの文書複写を、のちに自身が編集する『近世地方経済史料』の第 9 巻〔小野武夫 1932a〕と第 10 巻〔小野武夫 1932b〕に「琉球産業制度資料」の前後編として掲載した。

上記のことからみると、渋沢敬三がアチックミュージアムにおいて、地方の文書を筆写という手

法に注目するようになった直接のきっかけは、藤木による近藤富蔵の『八丈島実記』の謄写であったと推察される⁽³⁾。しかし地方文書を学術的な意味で筆写して残す発想は、アチックミュージアムに特有のものではない。

渋沢が『琉球産業資料』の複写を寄贈した一人であった小野武夫は、農商務省で働いていた1920～1923（大正9～12）年のあいだに、農商務省が1885（明治18）年前後に各地で収集した大量の農書類や地方文書を大量に筆写している〔一橋経済研究所附属社会科学統計情報研究センター編2010、p. ii〕。その際、筆写は2部作成されたが、1923（大正12）年に関東大地震が発生した際、原本を失い、筆写が唯一の残存資料となった。

小野武夫の功績は、こうした地方文書が単なる歴史研究の材料としてのみならず、政策を立案、実施する際に踏まえるべき実用の資料として存在していたことを示している。同時に地方文書を長期にわたって保全する方法として、筆写が官公庁でも採用され、広く共有されていたことを示している。

こうした時代背景のなかで、アチックミュージアムも地方文書の保全方法として、筆写を採用した。そして、本稿で取り上げている豆州内浦漁民史料の筆写は、資料に出会って突然発想されたことではなく、藤木らによる先行する筆写の業績の上に実現したことだったのである。

4. 祝宮静と豆州内浦漁民史料

上記でみてきたように、大川家文書をはじめとする豆州内浦漁民文書は1932年に渋沢らによって発見され、簡単な整理が行なわれた。この文書を編集し、出版の体制を整えていく過程で関わったのが祝宮静である。

祝と渋沢の出会いは1933（昭和8）年8月1日である。國學院大学における祝の師は、植木直一郎である。渋沢は豆州内浦漁民文書の整理と出版に向けた準備を進める人材を探して、渋沢の親戚にあたる穂積陳重と重遠親子に相談をした。植木は穂積陳重の弟子であったことから、人材探しは植木に託され、植木の弟子であった祝に声がかかった。

当時、祝は1931（昭和6）年に『神社の経済生活 律令時代』〔祝1931〕を出版したあとで、新たな研究の方向性を模索している状況にあった。そのなかで、声をかけられた祝は、一度見てみなければできかどうかかわからないと考え、1933年8月1日、植木に伴われて渋沢邸を訪ねた。

古文書室に並んだ豆州内浦漁民史料をみた祝は、その量に驚いたが、近世の文書のみてやれないことはない判断し、仕事を受ける。それから毎週三日間、朝に渋沢と状況・課題を話し合いながら、作業を続けた。

渋沢との出会いによって、方向性を模索していた祝は、渋沢から新たな研究の方向性として「神社と漁業」という視点を与えられた。『近江國野洲川築漁業史資料』の「まへがき」で、祝は「ある日、澁澤先生が日御碕神社と杵築大社との漁場争奪に就いて御話されたのでありますが、これ即ち私が極めて大雑把に〔神社と漁業〕といふ新しいテーマを掴んだ機縁であったのです」〔祝1937、p. 648〕と記している。

こうして始まった祝による豆州内浦漁民史料の整理であるが、渋沢の刊行方針は、資料を学界に提示し、誰にでも活用できる条件を整えることにあった。したがって祝への指示も「論文を書くのではない、資料を学界に提供するのである」〔渋沢1972a、p. 18〕というもので、原文を整理して、多くの学者の目に触れる形に整えることを目的としていた。

そこで、祝は資料の欠字を補うことと、文書を読む上で必要な情報を注釈として付与することを

仕事とした。祝は『豆州内浦漁民文書』全3冊が発刊されるまで、これらの資料群に関する研究を抑え、資料の整理に徹して渋沢の方針を守った⁽⁴⁾。

5. 渋沢敬三の資料に対する着眼点

大川家文書の学界における重要性は、文書発見時に会った資料すべてを網羅的に把握し記録しようとした点と、網羅的に文書群を把握することによって地域の人びとの生活を理解する視点を得ようとしたことにある。

前者については、渋沢は文書の包括的に把握する「一括へのこだわり」とも言える視点をもっていった。この視点は、調査者にとっての関心に沿って資料を切り貼りするのではなく、全てを提示するものである。

この渋沢の姿勢について戦後、山口和雄は「この史料集を編纂するにあたって、敬三は、編者の主観によって史料の取舍選択を行わず、蒐集した史料の大部分を収録することを編纂の基本方針とした」[山口1979、p.232]と回想している。

実際、渋沢は『豆州内浦漁民史料』の発刊のとき、資料集発刊の基本方針として、「原文書を整理して他日学者の用に供し得る形にすることが自分の目的なのである。而してその学者の用たる、目的により、種類により時代により、研究の視野・角度の変化により、今から何が一番価値があり何が全く無駄であり屑であるかは予想し得ない。一方文書は一村としては時代的にも量的にもまとまって居る。多少鮎物としての品位の点は落ちてても之は他日学者の精錬法に委すとして大部分を出版してみたい」[渋沢1937、pp.18-19]と述べており、発見から資料集の出版に至る過程で、地域の文書一括へのこだわりを具現化している。

一方、後者の文書群の把握から地域の人びとの生活理解を導こうとする視点については、渋沢は「常民古文書」という言葉を用いている。渋沢は大学生時代から社会経済史への興味を持っていた。東京帝国大学で山崎覚次郎に師事して書き上げた卒業論文のタイトルは「ビュッヘル氏の所謂工業経営階段と本邦に於ける其の適用に就て」であり、のちに「本邦工業史に関する一考察」として『龍門雑誌』に掲載され、著作集の第1巻にも所収されている[渋沢1992、pp.235-325]。

ビュッヘルとはドイツの経済学者 Karl Bücher のことであり、人類の経済発展段階を封建的家内経済の段階、都市経済の段階、国民経済の段階の3段階に分けて分析した人物である[本庄1919]。渋沢は上記の論文のなかでビュッヘルの体制としての経済システムを指標としつつ、日本における経済発展のなかで工場制工業が発展してもなお、家内制の手工業が脈々と生き続ける現状を分析した[渋沢1992]。

渋沢はこの議論のなかで、日本の手工業の展開を、古事記などを参照しながら細かく分析している。渋沢は諸職の発生に言及しており、この渋沢の視点は早い時期から渋沢が社会経済史的な視野を持ち合わせていたことを示している⁽⁵⁾。

渋沢の視点は、当時の古文書を用いた歴史研究への批判的な視点から出たものであった。当時の歴史学では公的文書への興味関心が高い一方で、渋沢らが「常民古文書」と呼んだ地域の社会経済史を明らかにする素材としての私的な文書への関心が低かった。渋沢が当時の学界に提示したのは、古文書を用いた社会経済史研究の可能性だったのである。

祝宮静は、この渋沢の姿勢を「澁澤子の所謂「常民文書」即ち百姓文書が絶対多数を占めるのであつて、その質といふ問題になると百姓文書の価値如何と云ふことに帰するわけであるが、「常民史料」なるが故に寧ろ社会経済史々料として価値を認むるべきであるとの見解を明らかにし、以て

編纂の方針を定めた」[祝 1937b, p. 41] と述べている。

こうした渋沢の興味を整理すると、渋沢が大川家文書への注目した背景には、一つには地方文書の扱いをめぐる歴史学への批判的なまなざしがあったことを指摘できる。そして同時にその批判的なまなざしは、為政者による政治史の分析から一般の人びとが積み重ねてきた社会経済史の分析へというパラダイム変換を促すものでもあった。こうした渋沢の関心と動機が、『豆州内浦漁民史料』の発刊を支えていたのである。

6. 豆州内浦漁民史料と渋沢水産史研究室

祝がアチックミュージアムで豆州内浦漁民史料の発刊に向けた準備に携わるなかで、祝を中心とした資料整理の体制ができていった。祝のほかに、整理には植木直一郎、相田二郎、野沢邦夫、金子総平、小松末夫、柿塚欣一らが参加した。また資料整理の相談役として、土屋喬雄、小野武夫、羽原又吉らが参加する体制ができた。以下、当時のアチックミュージアムのなかでの祝宮静と所員の交流と渋沢水産史研究室の成立の経緯をみていこう。

1) 祭魚洞文庫以前のアチックミュージアムと古文書室の祝宮静

1932年に渋沢が資料と出会ったのち、先に述べたように早川孝太郎や藤木喜久磨が現地に呼ばれて整理に携わった。1933年に祝が資料整理に加わる。当時のアチックミュージアムは、花祭地帯の研究がさかんであり、民俗学や社会経済史の研究者の溜まり場となっていた。祝の仕事場は、そのアチックミュージアムの2階にある古文書室にあった。

祝は週3日、古文書室で作業を続けた。祝は前日の夜にアチックミュージアムに入り、一泊して朝から作業を始めると、渋沢敬三が母屋から現われて30分ほど書齋で原稿を書いたあと、祝に史料の整理状況を質問したり指示を出したりして銀行に出勤していったという[祝 1964]。こうした環境のなかで、祝は豆州内浦漁民史料の整理を続けた。

祝の人類学・民俗学に対する知識は、このアチックミュージアムで所員と交流することによって深まっていった。祝は「古文書の整理に疲れると、私は熱帯魚⁽⁶⁾や階下の民具を眺めたりしていたが、その民具の管理にあたった村上清文君からは、民俗学会の同行について教えられるところが多く、また、すでに民俗学者として知られていた早川孝太郎・高橋文太郎の両氏からも、いろいろ有益な話をきかしてもらったりした」[祝 1971, p. 159]と述べている。また祝は綺麗好きであったことから「先生は、わざと私を農村の探訪につれていかれた」と述べており、記録をみる限り、1935年4月の越後二十村調査、同年8月の霞ヶ浦調査に同行している[渋沢 1961]。

同時に毎週金曜日の夜にアチック・ミュージアムではゼミナールが開かれ、民俗学や人類学、考古学、言語学、宗教学などの研究者が招かれ、祝はそこに顔を出していた。祝は戦後、文化庁の民俗文化財の専門調査官に就任し、民具を含む民俗文化財の制度起ち上げに関わるが、祝の民具に対する知識はこのアチック・ミュージアム時代の所員との交流から培われたものであった。

2) 祭魚洞文庫の完成と渋沢水産史研究室の展開

祭魚洞文庫ができる前、アチックミュージアムではさまざまなアイデアが具現化しようと動いていた。祭魚洞文庫以前のアチックミュージアムは経済史、村落社会学、民俗学、民家建築史学などの分野の人びとが共同して調査をしており、桜田の言葉を借りるなら、「敬三の日本の常民生活を知ろうとする追求方法は、天衣無縫と言える豊かさを以って、いろんな方法が考えられ、それがま

た実行に移されようと、せまい「アチック」の建物の中でひらめき合っていた観」[桜田 1979、p. 883]があったという。

祝が豆州内浦漁民史料の整理に関わるようになったあと、渋沢は編纂・出版準備のために人員を増やしていった。桜田の「敬三とアチックミュージアム」[桜田 1979]によれば、1932年頃に早川孝太郎の紹介で渋沢と会っていた市川信次が1935年9月にアチックミュージアムに勤務するようになった。その市川に渋沢と引き合わせて欲しいと五十沢二郎は、渋沢と面会したときに渋沢から文献索引の重要性を説かれ、市川よりも一足にアチックに勤務するようになったという。こうして1934年頃にアチックミュージアムの事業のやり方が出揃った。

こうしたなか、1934年11月に祭魚洞文庫の建設が始まり、年末に完成した。豆州内浦漁民史料の編纂室も年末に祭魚洞文庫に移ったが、移ると同時に高木一夫がアチックの常勤に加わり、続いて1935年に順次、山口和雄、小松勝美、野沢邦夫、桜田勝徳、伊豆川浅吉、岩倉市郎が加わった。さらに、1936年には大西伍一、磯貝勇、小野若木、浜田国義、村上俊順、1937年には木島一郎、滝波善我が加わり、1938年には大西が退所し、代わりに鈴木行三が加わったほか、同年に楳西光速も加わった。さらに1939年には戸谷敏之、宮本常一、1940年に竹内利美が加わる。以上のようにして、渋沢水産史研究室の骨格ができあがっていった。

祭魚洞文庫に集まった人びとは、日常は文庫の建物で研究や作業をし、民具や漁業史の研究会が行われるときはアチックミュージアムの建物に集まった。民具研究会は当初、毎週水曜日に開かれていたが、1937年頃から漁業史など、民具以外の話題を扱う第一部会が毎週土曜日の午後、民具の研究を扱う第二部会が毎週火曜日に開かれるようになった。所員は研究会に出るようになっており、各自の研究途上を報告するものであったこともあり、漁業史にしる、民具にしる、お互いが何を研究しているのかは知っている状態にあったという [桜田 1979]。

上記のような体制ができるなかで、戦後も漁業研究をリードしていった人びとが祭魚洞文庫のなかで育っていき、また渋沢水産史研究室の研究対象が広がるとともに、豆州内浦漁民史料が編纂されていき、1940年にすべての巻が刊行された。

ただ祝によれば、編纂の末期には祝は大学の学生を対象とした学徒動員などにより、その引率の仕事が入るようになり、祭魚洞文庫での作業からは離れがちになり、作業の中心は野沢邦夫らに移っていたという [祝 1973]。

3) 祝宮静の豆州内浦漁民史料研究

祝は、1940年に「豆州内浦漁民史料」の編纂が終わるまで、研究対象として豆州内浦漁民史料をほとんど論じていない。刊行が終わるまでの期間で同史料について論じたのは、1937年に「史苑」に発表した史料紹介「百姓文書を主體とせる「豆州内浦漁民史料」(上巻)の内容と価値とに就いて」[祝 1937]のみである。編纂が終わるまで、祝は「近江国野洲川築漁業史資料」[祝 1937]の研究など、渋沢と出会うことで得た「神社と漁業」というテーマに取り組み、研究をしている。

その祝が豆州内浦漁民史料を論文として本格的に論じたのは1942年である。『澁澤漁業史研究報告 第一輯』で、祝は史料の特徴について概観した「豆州内浦長濱村概観―主として村差出帳に據る一」[祝 1941]を執筆している。このなかで祝は税金制度を通して漁業組織・村組織を概観し、漁村ではあるが農業・納税史の歴史研究が必要であることを強調している。また1943年には「豆州長浜大網漁業に於ける網子の地位について」[祝 1943]を論じ、網元と網子の関係に注目して労働・身分制度を議論した。この論文から、祝が豆州内浦漁民史料を用いた研究の関心は、労働や身分制度に収斂していく。

この労働や身分制度に注目した祝の研究は、戦後、郷土教育に一生をかけようとアチックミュージアムを離れ郷里の大分に帰ったあとも続く。この研究が結実したのは、1957年に國學院大学に提出した博士論文「明治初年における「旧弊取直し」運動とその歴史的意義」である。この論文で祝は博士号を取得し、1966年に隣人社から『豆州内浦漁民史料の研究』[祝 1966]として刊行した。

こうした祝の研究の経緯をみると、祝は戦前には渋沢敬三の方針を守り史料整理を続けながら、そのなかで研究の視点として中学校時代に得た研究の視点である労働や身分制度に対する興味を深めたことがわかる。そして豆州内浦漁民史料を資料整理だけで終わらせず、ある意味では、祝は最後までこの資料群を引き受け、いわば社会経済史的な視点からの資料研究を体現し人物だと評することができるだろう。そういう意味で、祝は実直な渋沢の方針の具現者であった。

7. おわりに

1) 渋沢水産史研究室から新漁業法へ

最後に渋沢水産史研究室の活動が、戦後の新漁業法に与えた影響について検討しよう。これまでみてきたように、豆州内浦漁民史料の発見から整理、研究に至る一連の流れの根幹には、渋沢敬三の社会経済史に対する興味があった。そして社会経済史への注目が、渋沢水産史研究室の研究を多様なものにしていくきっかけとなった。そうした渋沢水産史研究室の成果は、その後どのように展開していったのだろうか。以下では、渋沢水産史研究室の視点が反映されたと考えられるもの一つとして、新漁業法について言及したい。

1949年に制定された、いわゆる新漁業法は、現場の視点を取り入れられた法律である。実際、この法律の立案過程では、日本人の専門家による実態調査の成果が取り入れられている[久宗 1985]。法律制定の過程で実態調査の結果が反映されることになった背景には、GHQの案に対する日本側からの反発があった。

GHQは漁業制度改革の実施にあたって、農地改革を手本とすることを考えた。農地改革では、地主の田畑で地主のために耕作をしてきた小作農たちに土地を分配することで、農村の民主化を促したのであるが、GHQはこれと同様のことを漁業でも実行しようと考えた。つまり各漁業者に漁業権を与え、旧態依然と捉えられた漁業制度を解体して漁村の民主化を図ろうとしたのである。

このGHQの動きに対して、日本の専門家たちがGHQの案は実態に合っていないとして、調査団を組んでGHQの担当者を連れて各地をまわり、漁村や漁業の実態を調査した。その調査のなかで、漁業慣行の調査も必要と考えられた。その結果、水産庁が中心となって、日本各地で網元など、地域の漁業で主要な役割を果たしてきた家から水産関連の古文書を借り受け、研究することになった。この古文書調査で借り受けた文書類は、返却されずに残ったものが多く、のちにその返却の過程が、網野善彦による『古文書返却の旅—戦後史学史の一齣』[網野 1999]として著されることになる。

こうした戦後の漁業法をめぐる一連の動きのなかで、公的な機関である水産庁が各地の水産関連の古文書に注目したことは、渋沢や祝らが携った豆州内浦漁民史料の整理、そして整理ののちにアチックミュージアムの所員たちによって展開された史料を使った研究の成果と無関係ではないと考えられる。

行政機関が古文書を集める発想自体は、農商務省時代の小野武夫が関わった文書の筆写にみられるように、明治時代からあった。それ自体が新しい発想だったわけではないが、渋沢の社会経済史への興味から発展して渋沢水産史研究室の研究活動は、こうした文書を活用した社会経済史的な研

究分野を開拓した。そして戦後に新漁業法を構想する際にも、踏まえるべき視点として採用されていたことがみてとれる。

こうした経緯のなかで、戦後、水産庁が中心になって各地の古文書を集め、その知見を反映しようとする試みが続けられた。しかし結果的には水産庁の目論見とは異なり、実際の漁業法に古文書研究の成果が十分反映されることはなかった。

一方で1952年に発刊された九学会連合編の『漁民と対馬 漁業制度改革の討論』[九学会連合編1952]には、水産庁の職員と渋沢を中心とする九学会連合のメンバーが一堂に集い、新漁業法の問題点、課題を民俗学や人類学の視点から討論した際の議事録が掲載されている。この会は、制定から3年が経った漁業法を見直す作業のなかで開かれたものである。結果を言えば、この意見交換会の成果もほとんど法律に反映されることはなかった。しかし、この会が開かれたこと自体、水産庁が渋沢水産史研究室の戦前からの研究成果に対する興味を失っていなかったことを意味しているだろう。

2) 豆州内浦漁民史料の意味と祝宮静の役割

上記を踏まえて戦前の豆州内浦漁民史料の発見から刊行に至る過程が学界に与えた影響と、その刊行に関わった祝宮静が果たした役割をまとめよう。

豆州内浦漁民史料の発行から刊行に至る過程は、これまで見てきたように、渋沢敬三の社会経済史への興味によって展開した。当時の文書研究の多くは、研究者にとって都合のよい資料のみを取り扱う傾向があり、その研究内容も政治史に集中していた。一方、渋沢は社会経済史という視点を持ち込み、為政者の歴史ではなく、渋沢の言うところの「常民」を対象とする研究という分野を切り開いた。

渋沢の手法は文書を対象としたものであったが、生活者が社会状況をどのようにとらえ、またどのように生きたのかを明らかにしようとするものであった。そして渋沢が育んだ視点は、決してアカデミックな興味の深化のみを追求するものではなかった。本章の1)で述べたように、戦後の漁業法改正で現場主義的な視点が制度設計に取り入れられたことを考えると、政治に影響を与えるプラグマティックな視点を併せ持っていたといえよう。

こうした視点を編纂に関わるという形で支えたのが祝宮静であった。祝は渋沢水産史研究室の起ち上げの時期にその場に立会い、戦前の一時期、研究室の発展と歩みを共にした。そして祝の携わった豆州内浦漁民史料の刊行は、渋沢水産史研究室の研究を方向付けていった。いわば、渋沢がめざした水産史研究室の姿を体現していく人物として、祝は存在した。そして、豆州内浦漁民史料の編纂をきっかけとしながら、渋沢水産史研究室は多様な視点からの研究を発展させていった。

そのなかで、祝は戦前、神社経済史を標榜する研究者であったが、その根幹は労働や身分制度に注目する社会経済史的視点にあった。祝は生涯にわたって神社経済史、漁業研究、民具研究と多分野にわたる研究活動を展開したが、そのなかでながらく保ち続けたのが労働や身分制という視点であった。

それは2で論じたように、父親に勧められて読んだ『古事記神話の新研究』をきっかけに出会った石川三四郎から得た興味であり、大学、渋沢水産史研究室の時代を通じて洗練されていった研究の視点であった。この視点を維持しつつ、6の(3)で論じたように、祝は渋沢の立てたプランを具現化し、かつそれを研究に反映させていった、渋沢の視点の実践者、具現者の一人であったと言えよう。

注

- (1) 祝宮静は、この文書群を「常民生活史料」と表現している〔祝 1973〕。
- (2) 本論では、アチックミュージアム彙報ではなく『日本常民生活資料叢書』の第15巻〔渋沢 1972a〕、第16巻〔渋沢 1972b〕、第17巻〔渋沢 1973〕を参照した。
- (3) 桜田勝徳はアチックミュージアムが古文書を扱った経緯を、文庫ができる前のアチックミュージアムでは「松江藩の稲塚和右衛門の「木実方秘伝書」の筆写を藤木が進め、一方、三河下津具の松村家の「万作物覚帳」をめぐって、この記録に出て来る畑作地の地名の所在調査や村松家の家族構成の変遷史料を求めること等が、早川によって行われていたと推察される」〔桜田 1979, p. 868〕とし、祝が来てからその機運がさらに強まって「文庫」の建物を生み出す原動力になったのではないかと推察している〔桜田 1979〕。
- (4) 渋沢は豆州内浦漁民史料のあらましを書いた文章のなかで祝宮静の姿勢について「祝さんが學者としては幾分の議論もあつたらうが己を殺して全く自分の主張を容れられた寛容さには深く感佩して居る所である」〔渋沢 1972, p. 19〕と述べている。
- (5) 山口和雄は渋沢敬三の「本邦工業史に関する一考察」について、「ここでとくに指摘しておきたいのは、渋沢がすでにこの頃から経済史にも興味をもち、それを研究のテーマとしていることである。もちろん、彼の大きな関心は民俗学、とくに民具の蒐集と研究にあったが、経済史にも関心が深かったことも注意されなくてはならない」〔山口 1992〕と指摘している。
- (6) アチックミュージアムの2階には、祝が作業をした古文書室とともに、熱帯魚を飼育する熱帯魚飼育室があった〔祝 1971〕。

引用・参考文献

- 網野善彦 1999『古文書返却の旅—戦後史学史の一齣—』中央公論新社。
- 小野武夫編 1932a『近世地方経済史料』第9巻、近世地方経済史料刊行会。
- 小野武夫編 1932b『近世地方経済史料』第10巻、近世地方経済史料刊行会。
- 九学会連合編 1952『漁民と對馬 漁業制度改革の討議』関書院。
- 久宗高 1985「制度改革」NHK産業科学部編『証言・日本漁業戦後史』日本放送協会、pp. 41-62。
- 渋沢敬三 1961『犬歩棒当録』角川書店。
- 桜田勝徳 1979「(三) 敬三とアチックミュージアム」渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三 上』pp. 845-924。
- 渋沢敬三 1972a『日本常民生活資料叢書』第15巻、三一書房。
- 渋沢敬三 1972b『日本常民生活資料叢書』第16巻、三一書房。
- 渋沢敬三 1973『日本常民生活資料叢書』第17巻、三一書房。
- 渋沢敬三 1992『渋沢敬三著作集 第一巻……祭魚洞雑録 祭魚洞襍考』平凡社。
- 渋沢敬三 1992「本邦工業史に関する一考察」『渋沢敬三著作集 第1巻』郷土研究社、p. 235-325。
- 東京大学百年史編集委員会編 1985『東京大学百年史 通史二』東京大学出版会、pp. 309-314。
- 一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センター編 2010『小野武夫文書 I—近世文書を中心とする収集資料—』
- 祝宮静 1929a「大化以前の労働制度に関する考察 (上)」『國學院雑誌』35巻第1号、pp. 63-85。
- 祝宮静 1929b「大化以前の労働制度に関する考察 (中)」『國學院雑誌』35巻第2号、pp. 30-50。
- 祝宮静 1929c「大化以前の労働制度に関する考察 (下)」『國學院雑誌』35巻第3号、pp. 40-57。
- 祝宮静 1929d「律令による雑戸陵戸の比較」『國學院雑誌』35巻第12号、pp. 63-72。
- 祝宮静 1929e「律令時代の賤民制度概説」『史苑』2巻第2号、pp. 112-123。
- 祝宮静 1929f「我が国奴隷経済時代に於ける奴隷と其の使役者との交渉」『史苑』2巻第6号、pp. 21-50。
- 祝宮静 1931『神社の経済生活 律令時代』木村天真堂。
- 祝宮静 1932a「原始労働の類別 (バクストン)」『國學院雑誌』38巻第5号、pp. 82-86。
- 祝宮静 1932b「原始労働の類別 (バクストン)」『國學院雑誌』38巻第6号、pp. 75-80。
- 祝宮静校註 1937「近江国野洲川築漁業史資料」『日本常民生活資料叢書』第18巻、三一書房、pp. 645-927。
- 祝宮静 1937「史料紹介 百姓文書を主體とせる「豆州内浦漁民史料」(上巻)の内容と価値とに就いて」『史苑』11巻1号、pp. 41-51。
- 祝宮静 1941「豆州内浦長濱村概観—主として村差出帳に據る—」『澁澤水産史研究室報告 第一輯』澁澤水産史研究室、pp. 1-153。
- 祝宮静 1942「豆州長浜大網漁業に於ける網子の地位について」『澁澤水産史研究室報告 第二輯』澁澤水産史研究室、pp. 309-338。
- 祝宮静 1964「祭魚洞文庫と先生」『民間伝承』No. 266 (28-4) 六人社、pp. 175-176。

- 祝宮静 1966『豆州内浦漁民史料の研究』隣人社。
- 祝宮静 1971「あとかき」『民俗資料入門』岩崎美術社、pp. 157-162。
- 祝宮静 1973「第十五卷 中部篇（3） 第十六卷 中部篇（4） 第十七卷 中部篇（5）解説」渋沢敬三『日本常
民生活資料叢書』第17巻、三一書房、pp. 1161-1171。
- 祝宮静 1976『神道・神社・生活の歴史：祝宮静博士古希記念著作集』祝宮静博士古希記念著作集刊行会。
- 本庄榮治郎 1919「ビュツヘルの經濟階段説に就て」『經濟論叢』8（6）、pp. 840-846。
- 山口和雄 1979「著作解題 豆州内浦漁民史料」『渋沢敬三 上』渋沢敬三伝記編纂刊行会、pp. 229-242。
- 山口和雄 1992「渋沢敬三、人と仕事―戦前を中心に」渋沢敬三『渋沢敬三著作集 第一巻……祭魚洞雜録 祭魚洞
襍考』平凡社、pp. 623-644。